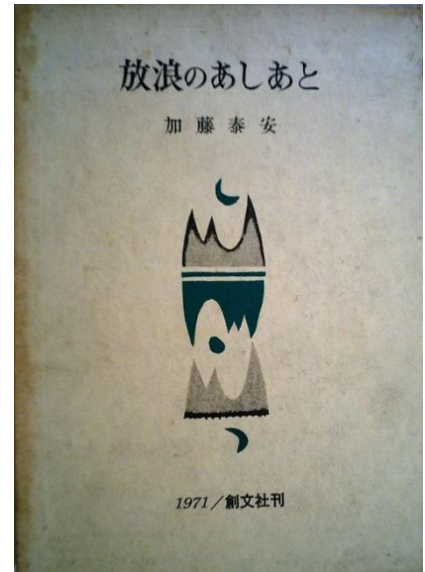


加藤泰安著 『放浪のあしあと』

著者が還暦になり、身体も壊して山を休んでいるのを期にこれまでの山行を振り返った随想である。戦前の京大・鮮満国境「白頭山」遠征、満蒙「大興安嶺」遠征や戦後のマナスル遠征の思い出などに加えて、日本での静かな山行、スキー行などがユーモアたっぷりの筆で語られていて楽しい。この本を読んだのは40年近く前で、結婚して長男が生まれた頃であった。当時は入社早々の安月給取であったから、子供のミルク代にも事欠く始末であったので、当時としては高価だったこの本を買うのは気が引けたが、ミルク代をチョロまかして買ってしまった。本の中にいたずら書きが一杯残っているのは、ミルクに恨みを持った我が餓鬼のなせるわざであろう。

さて。

本文の内容はさておき、「はしがき」で著者が述べていることが、「山を続けるなら酒とタバコを止めなさい。止められないなら山を止めなさい。どちらがいい？」と我が山の神から脅迫し続けられている煙突スモーカー&オロチである小生にもピッタシカンカンであるし、多少は見習うべき部分もあろうかと思うので、煩瑣を承知の上で引用してこの本の紹介に代えることとしたい。



「・・・医者と喧嘩して退院すること数度。酒と煙草を止めなければ絶対に治らないと藪医者どもは脅迫する。しかし、私は自分の意志薄弱を断固として信じている。両方とも決して止められない。若し医者の言うことを守るなら、それは自分で治すので、何も高い金を払って入院することはない。だいたい医者とか、学者とか、芸者というものは弁口にたけ人心をまどわすものである。名医ならば酒も飲み、煙草も吸え、治療は引き受けたと言うべきである。

しかし、気がついてみると病をえてから既に5年は経ち、まだ登りたい山、行きたい所が沢山あるのに還暦を迎えてしまった。これには私も少々あわてだした。医者と喧嘩した手前、また意志薄弱の名誉のためにも禁酒、禁煙はできない。節酒、節煙くらいまでは妥協している。しかし、これはやはり良いらしい。目下私の健康は次第によくなりつつある。登ろうと考えている山、行こうと思っている土地を一通り歩き終わるのには私の計算によるとあと15年にかかる。75歳である。酒はそれからにしよう。去年、伯父が百歳で亡くなった。また今年、一人の伯父が93歳でこの世を去った。二人とも若い頃から大酒飲みだった。長寿の家系ということを保つればまだそれからたっぷり飲める勘定である。(中略)。

勤めに出れば公害、家に居れば妻害、その上孫害まで加わった。一人前の健康体になるにはまだ1年くらいはかかるだろう。しかし、私はくよくよして不幸な生活をおくっているわけではない。私には長い間過ごしてきた楽しい山登りの思い出がある。はるか昔から登った山々、親しい山仲間のことを思い出しているだけでも幸福である。

この小著は、酷使した体の一服状態の間に書きためたものである。思い出話ばかりで少々老人くさく、我ながら恥ずかしいが、これが次のスタートのスプリングボードと思っている。登山界には70歳になっても、80歳を越えても山々を駆け回り、病人の私を軽蔑して楽しんでいるイジワルジイサンが沢山いる。やられっぱなしで、はいさようならなどと言われては、せっかく長寿の家系を作って下さったご先祖様に申し訳ない。来年こそは一緒に、愉快地山に登りましょう。覚悟召されよ各々方。

昭和46年 春 著者識」

創文社 1971 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)